

RODAK color checker chart
© The Munsell Color Services Company, 2000
LICENCED PRODUCT



菟玖波集

十六九



明
號
卷

皇
極
集
卷
第十八

菟玖波集卷第十八

賀連詩

四月朔りもちけり
給ふは
天曆御製

清
和
天皇

倉持氏印

あゝき年のうゝ
とけり句も伏見
連歌の連歌は
中々

伏見院御製

民乃一
後多和院
時一あ
源家長朝臣

君年あふみのあふさゝ乃山
其のさけを法をせさうなり

前々納言乃氏

上下もたもひあひぬはき法をこそ
其のさけを法をせさうなり

今上御製

いつちぬ神乃公もひと法をこそ

嘉暦四年七月内裏の事なり

かこころを法をせさうなり

前々政大臣

車のさきなりと云ふことなり

神乃さやいさ伊勢なりと法

導言法師

人さるも人の上なりと云ふこと

心のさきも其なりと云ふこと

救済法師

勅なりと名もたふ法をこそ

此木をや藤の林なりと云ふこと

善阿法師

子歳をゆふもきこふこと

法なりと二心なりと云ふこと

二心法師

我の身さうふは是れなりとも
みぢも其の清き流に永く

前古納言氏

ともさうふは家多き此いへ
風雅集撰りし傳へ頃多し
事多し
かく二のた乃玉

左古納言氏

いふ一四風を雅くきり
古郷へ帰る人ふありとも
前古納言氏

七乃由孫子買其あふ
か多しと云ふこと

民部省為

清くする買、見く、あは世

建永五年八月朔日乃顔

うはまきし年

後膳家院

道あふと世をたふ

さか娘乃其むる

前古納言氏

千代をニ免くは杉風乃聲

うきうめらうも、うきうめらうも

常盤井入道大臣

さへおききふは江の婦——うき

二品法親王少輔社の千句年

みやこおききふは江乃孫

孫原忠頼郎臣

おききふは江乃孫

道おききふは江乃孫

源親光

清うへんとかきき世をわたりて

玉——くきき世をわたりて

良阿法師

ふもアがき月いかのうき

あけき免くもい御代おきき

十佛法師

ふか人の果おきき世をわたりて

ふもアがき、秋とや月の晴ぬ

最方切言お家

いふもさやけき果、秋とや

照りあふん四方のめくふ春の月

西園寺 入道前
左近将監

海山あけさ久しうもてしるる

人々も春を思ふにやあけさ

常の根のたきり影のちみけき

後多町院市製

千代乃を思ふ庭乃まけり枝

く公も老をありけり

関白前太大臣

天々代乃はふり民もさぬ

節を婦しる歌うとふ

小槻景安

國栖人の共ちまたさき

此世乃似るり市代のなけま

市代乃言あ家

千々乃あきく久しうもてしるる

行末もかりぬ中の響りしる

後宇多院市製

花と多しの春をいさ

正和四年五月依見あふ顔

く地之國 道一阿

伏見院市製

世々の君一乃跡毛カリくあ

非のふむ跡年ふけり柳葉

最古細言為氏

天の代をさるえかきち年祈新うち

上下のあそそいあしきききき

左近中物義詮

君と人ともや思ひあふらん

か—にきい賢きを亦友と—と

源信武

市代もおさまり國ものせけ—

身のさうこき様もきいあき

源頼泰

以市代年石さ—志あ、不破の美

非とあ—い—名も高き山

性道法師

伊勢ろくや君—を君の位さく

おろき人をも守は石清水

藤原知春

たうにさうは天と君がき

かーニきを皆いふとよ

前中細言三氏

法々々々人毛世ふて我法之んま

いゝも祢の父の心を傳へ来る

そ矢を取もつゝかー我なり

祢のえううを人をもさうに

二所法親王

買子あるそのなりきもいふ

都うは伏見深井かちあー

あをいふきいすの此き

買をうしとを身は何せぬ

關白希花大臣

底清き水と魚とのこく

元亨元年十月通以殿り額

かーニきを腕を得て仕へ

後宇多院御製

ううーかきを人や知海人

前中細言有忠

あめくきと海堂か法道なり

都ふき教ぬ振を寄るか

前中細言有教

にきーや井能来りて久ー

島きくくは海防を得る

丹波忠守親臣

清くは我道もきよりぬく山
くもくなきく我々新代は

関白赤尾大臣

くかきくりのつ、果とあきり

邦のまは邦の心野、おそく

赤尾細言多氏

いつくもわく代にわくはすし

西国を清くはくはく項常を院を額

やうては、さきは、代の國

多くくはく西の海をくはくはく

赤尾四年七くはくはく

果、くはくはくはく

後光昭院 赤尾
大臣

くはくはく御小も果免は清水

くはくはくはくはくはく

忠房親王

果、代乃あき、時、清くはく

昔くはくはくはくはくはく

後二位家隆

清もきけ、果、あはくはくはく

ちしせぬそ 千 年 亦 後 法 師

救 海 法 師

君 代 海 の お 山 乃 幸 川 乃 鶴

ひ も ち く 岩 う 法 師 乃 鶴 乃 鶴

云 生 法 師

法 師 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

寛 治 元 年 三 月 法 師 乃 鶴 乃 鶴

永 買 乃 あ の 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

永 意 法 師

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

永 意 法 師

か 二 千 年 亦 後 法 師

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

三 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

山 階 入 道 永 意 法 師

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

後 暁 臨 院 乃 鶴

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴 乃 鶴

永 意 法 師

千年如ふふ世のふし

後多の院千なり 号三字中略四字上
略中略千

夏山の雲々もぬおまろはき

前中細言有忠

清けを志けし 兼代をあらえ

ふふのや思ふふき 招のふふ

清けをうふ 君の千もあは

ふやこのふもふふもふふ

後二位家隆

ふ君ろふせふふもふふ

かを水留ふ 雪清ふふ

後宇多院御製

ふ中のふふふ ぬふふ

ふふふ 前中細言有忠

清ふふふ 千なり

前中細言有忠

千なり 鶴のふふふ

菟玖波集卷第十九

雜躰連詩 誹諧

大田乃雀乃門もあは毛のを

導峯法師

引子おとほくふふ乃あをる

二ふ法親王北野社千句中

名の二あう羽をうさきうは

関白前左大臣

雪のあはせの新年あそこきうたれ

梅の華をわきまをきとる

後小野宮右大臣

流俗のそとをうらむむ免乃集

源致方朝臣

珍重あつきものとしぞし
さへえりさうもまをゑあつは

通事笑法師

雪の子ふあを啼あをせ
ちうはきうき意知るうたふ

人不知

かく山年染くは雪のおうい

うー一時の示ーもゆえ

前右納言氏

いりしそ百と歩時と来うぬん

おこふ公とーかふ時なりや

周阿法師

月々雪なりー舞年風をー

をちこちうむーちの明灰

用通法師

うち花のうやいさめぬさう

かくーたーきまの別務

務原信務

花をー庭のうち木の端まはる

ふんちんちや未く成小色

前々細言為氏

古くは物法 尊とおもふ

阿彌の講おこりいふ法 聖王の傳大
りしと 誼國の人らや

うも人不知

極 示 4 由 き 小 法 とも 法 哉

と 信 ず

弘 智 法師

空 しく 法 師 の 法 といふ

法 師 寺 花 見 傳 へ ば 人 こと けい へ

山 さ しく ち 志 へ 法 師 の まし 道

と 信 ず

法 師 歌 昭

美 年 ち あり 風 雲 吹 ぐ らし

か づ あり 啼 ぐ 雲 山 崎 の 花

影 阿 法師

あ しく とも 法 師 の 法 師 力 かな

お や 4 あり 志 へ 法 師 子 こと けい へ

うも人不知

永 遠 小 法 師 の 法 師 根 こと けい へ

か ち 人 の 法 師 法 師 志 師

関 白 前 太 大 臣

お 川 あり 水 の けい へ 法 師

福 永 の 永 あり 月 あり 年 あり 法 師

紀貫之

たけふ木の葉やうきうきと覺
夕方の月のをやま

道安法師

枝を推布をおは後乃一うけ
関白教思寺より万願寺に移す

号 4 法くろととこをう

素阿法師

前後外あはさふもあふ

歌の千句

うふ関こあはさふのたぐ

関白兼大臣

寺小田中りき唐の由とひ

右のふも千名帰くが

歌阿法師

法くろととさかろ河原の夕霧小

関ふととぬととがととと

人不知

ゆふとととと衣う法を

むーとととととととと

うーとととととととと

あやーくもいさう上のさ

まーのあやほきと酒と一とんと
一とんと

前右大将頼朝

まーもとの君もあて何とらとす一き

平景時

まーあやまやまのくまてくあてとや

熊野一とらとらと孔子の山とふ所

少く

昭長明

まー山とあま死つき岩根とち

證心法師

あやほきとまあち、ほくもとらと

瞻西上人雲居寺の極樂堂とて

作りとあて坊をぬきとらと

京極前左政大臣

ひーのやとてとて一とあけと

いとと

瞻西上人

あやろ下もとてと聞やほとてと

室后室のまけあきとのまとと

とあやさんと一とあや人もあてけと

人しとていひをくり作りと

後頼朝臣

やと水のあてとてとてと

後年女房のうとてとてと

少々少々といふ事

藤原朝臣

多々いふ事

吉水坊の夜々々々々々々々々々

一々々々々

大僧正

かゝりきりやりやりやりやり

月をのむるや

関白大臣

くもるまはるのち船々々々々

舟をくくくくく

前大御方

夜々々々々々々々々

浸々々々々

二品法親王

光々々々々

あーややく

通事

人々々々々

いふのやうに

周阿法師

松阿々々々

まゝに海も海も人不知

人不知

賤のめりぬきぢふくを立なきこと

ぬりやわが心をやあめらん

やまうーのこけ申ふっかろくち

かゝとほ原ハ集りらん

河舟の湖瀬もちくぢやぬきぬき

あやふく来く酒くく若帰らん

後光明院前関白
太政大臣

うゝくやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とけりふふふ 同家宣旨

風とあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

敬心法師

上々ゝゝ山のゝゝゝゝゝゝゝゝ

石のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

救海法師

双六のちあゝゝゝゝゝゝゝゝ

春の田ろあき入ぬきゝゝゝゝ

宇治入道前関白
太政大臣

かの水々々々々をいれろや

うぐいあ乃子 かゝる ちきん

敬心法師

親の名は末一文字いと受けし

とき取くすけうら道平兄の社と
甲那の雨前あき 子孫原清輔即臣

あふのやー後そこのうゝ子子

と結ふ十四五ちかりがらるるうゝの
うそりばうけ付りて家

ちぬやきそその歳年いゝりん

河のちうらうらうゝいそふんり
いゝ人不知

水うゝあふのうゝらやゝぬん

軒の下うゝ夜をあふんり

龍のうゝの祢うゝそがう放ちり

いゝうかりをさむかはよさよ

あゝゝ乃うゝむゝは道平

いゝあき平はのいゝあきかへぬ

救済法師

やぬし車をあゝはせ

将平あゝは道平旅のまいてゝあき

あゝけゝゝあはるきはるか

平景時

あゝあゝ夜ふけふんとしふつきふ

ふふともがけく鎌倉へ下向し侍ふはと
う海老のこけすきふふい侍るは

あー何いふやふのやをさく
そを聞え

鴨長明

ふこーふこーしか川を渡は人

清き水く人々酒をへふふふふふも
ふをふふふふふふふふふふふふふ
かーとふふふ

あさひの公地をふふふふふふ

紫式部

ちくまね神乃ちふふふふ

就る尾のむふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

と人のいふけふふ

皇太后宮女

かーきふふふのかふふふふ

あゝふふふふふふふふ

最古の歌

いふふふふふふふふふ

世の中ふふふふふふふふ

ふふふふ

のつゝのゝとゑとゑとのつゝのゝとゑとゑの
まゝにちて書けりとは

前中細書明

むー乃々ゆふちをまはる
まき、鬼ともなりふ家あふ

敬心法師

古寺新朝の瓦牙若じ—

い
の
家
之
世
無
い
す
も
た
る
後
一

靜翁法師

う、我くは鬼を正峯にたて
水々々々々々々々々々々々

人不知

山も雪の眞の末舟なき事

常々 鄭くやきとてそふのかゝぬふ

久
ふ
の
お
あ
し
乃
山

い
我
や
能
唐
之
今
不
成
る
如
家

前
方
切
言
上
氏

中々きく子に新を毛取ふ

去
法
く
も
る
露
を
も
た
く
石
の
上

二
子
法
親
五

中子に肺を毛く

きけの米いゝ人のく免

殺海法師

神々々の庭のまきとをすくふこと

関白家千句

門如海き比あは寺い水澄く

素阿法師

あゝおろき馬乃四ッ足

たこぢひ人の手をくくらせ

良阿法師

室の戸乃舞あゝに多をくく

うちうぢい海新頭花あ那

大阿言お氏

せゝあゝ能夕法け多のいふく

いぬあゝとふおのやうなの子常生る

藤原實清

いぬゝその中々生はるの子うは

とふを聞るゝゝ人不知

あゝをゝおきゝ後年ひゝせん

あはきふ下り侍るふ友だひゝ人な

影阿法師

界高きあゝゝ部力法足も素

ゝゝひゝゝ足をきゝゝ法ゝつき

後頼朝臣

水々其の湯をくぬものうを

梨をやくうりふ家ふやけたるは

赤方細きお家

かくちうしとやけぬぢーこの

とふうふ 安嘉門院回衆

おふの浦の延寿の市かきさうと

ひ後き、室子もあふ家、あふ

西行法師

ぬき、海子うまはきひのうかふ

玉はるや田ーまうかふらふ

くも人不知

まふ、あふ、秋の石、音

くをさきーとも、うううん

山里けひの井のぬー、さふ

春秋うふ市、此市

素阿法師

花も、うう、人、あふ

目う、う、乃生、さふ

幸暹法師

か、人の、あふ、あふ、破き、編

大、さ、人の、きも、う、う、

良阿法師

ふふふ子のふふふ書は文字をふふ
ふふふは杖を老ふふふふふ

殺海法師

おもふふふや子をふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

西意法師

人ふふをけふふふふふふ
修行ふふふふふ路を行ふふふ
なき山のふふふふふ

西任法師

世の間ふふふふふふふふふふ

ふふふふ

西行法師

あふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ

俊頼朝臣

ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
馬のふふふふふふふふふふ

あー乃やまひ千とぬしそり

素阿法師

大羅のさいふことなき身をもちそ

さくのまふそそりあふこのとる

明見法師

懐目あふくぬやのあつたふこ

あふあふくぬは山寺の牆

導雲法師

戸をぬくふ佛をくそだる屋

老ふふ氣あふあふそだき

救済法師

古藏のふきつゝだふたひー里

あふあふき里いさあふそだき

前右衛門言三氏

大のそふあふくぬのまゝたふ

前右大將頼朝上洛の時宇山をさ

ふあふいさふあふきりあふそだき

あふあふいさふあふ

平時政政臣

もふあふきもいさふあふそだき

前右大將頼朝

あふあふいさふあふそだき

年中行事の傍りのとてふも
あふく人ふもあふく人ふも
いせふふいふく人ふも
店く甲けを聞く甲細言國信の
まもふにおいふ甲あふくも
ものふと甲あふくをきく
甲あふくいふくあふく

堀川院御製

やの上ふふものふ一人のなり
後頼つふふふふふふふ
甲あふく
下ふふふふふふふふふ

受富國師の西芳精舎あふく
甲あふく

あふくあふくあふくあふく
とふふふふふふふふ

救海法師

こをふふふふふふふふ
あふくあふくあふくあふく

敬公法師

あふくあふくあふくあふく
法性寺花のけふ夜あふく
あふくあふくあふく

ふふ人不知

系さく夜まゝるるに寝たり人

と侍りてまゐり 覚豪法師

大夫乃上坐 覚豪法師

いとおりいふをき

数善をおひけり行風七郎

ふふ人不知

大なりきかゝる子小くはるるあま

夜行や子子立る後石かきけ

と侍りて

火あやういとをみあう毛甚

古く衣ぬき子捨る歌

素阿法師

二もりの杉のあけ平水あま

主も後者も酒をこき能免

敬公法師

うめをとも小くう海平法師

伊波園を修行し侍る家小林さ

きしふ所

ちやーさき侍るといふ帰き

と侍る 玄忠法師

つるうけをうちたしは

系まのうけをきおたり

西国法師

玉うつゝ地蔵菩薩のえびと

五ヶ年舟出とふ虫のむらたを

うゑ人不知

舟むーいゝこのうらな渡りな家

とけりなふ

かういゝらやさして来はるん

風船入うりな海人おををいふ

風船のうちあふおををいふ

十佛法師

おたとのあふうりしの湯入る

骨阿弥夕暮ふきゝるなを

二芸生法師

あゝぬゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

骨阿弥法師

無生の毛ね、老のひめや

人の家ろをそのぬーゝ家を

ぬーゝ家ををふふふふふふ

念阿法師

ぬーゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

道寺吳言法師

雪の上にあーやとそそ寝あそん
仏ふにうき物をやこのむしそ

敬公法師

極樂いふきやうに海なるまふり

後多の院市時白黒賊おまのやふ
豊のあふきの雪のあけなる
といふふ

按察使光親

ふといふやれ袍ろくはーや
ころのほくきくひふをりふ

赤中納言宣家

大ひけのーあまおいておおも

ろ文精士なりは家人の妻をのりの
あさうとふものぬあそはるや
ぬーたふとふ行あひく西のーへふ
るしそ

不知人

初めはあめ

天文をうきいふはあそ

とそはなはふし人不知

何とそふそふのかふふなるは
といふふ

む 免水とそもすくもあそ

連ぬとそ人の称うりなふ
まふれくいふが賊ものふふ

天文
初めはあめ
初めはあめ
初めはあめ

とていふは

何本をとくくまてふせん
かきくちう海常の愛系

敬公法師

十部うおむひきうとてふふ部とよ

堀川院時中堂上童如事記を
いひふりて法をた中并是家思いて
お中と聞て一う程なく言せうとて
はこふや事記を一とて言もてぬ

後頼朝臣

志と一も宿とふてつけよ

説法一は道場と多形なりは法
をうはせこの醜聞の人乃中とひは

うとふともうぬ
かくて法を聞て唐人の竹付りて法

捨身惜花思
身をあててを
たしや思ふ人

連句連詞

六条内大臣禅林房の家小書
なりとて和漢聯句と

紫焚貴神靈

後宇多院御製

二とて世をも多ふけぬは

孤身塵夢魂

とふ白

花園院書制

古きよき帰依心ハカニ海

春秋運契長

後醍醐院書制

いゝ花の葉も水ぬる人

嘉暦四年七月内裏連白連

可大賢人業

後光明院大臣

老木能まじり法も雪か

千本の花も信るを和漢

客心雨滴愁

関白赤光大臣

光るる草の葉のふり

後宇多院禅林寺の家平

と和漢聯句作り

放鵲知量

六条内大臣

玉札を唇にけは多くひ

竹戸風関関

前左衛門

光もたふものいゝ月のけ

塵根萬事非

大宰権師俊實

捨る世を思ふに悔しき

家の和漢書句

誤到神仙宅

清かのちもあまはるいあま

春風拂一樽

清和天皇

けふはくしうとて花を

通田顔舎遠

後醍醐天皇
龍大臣

まかあは水うまかき

嘉暦二年七月和漢書句

野中清水涼

後醍醐天皇

ちきとてちきとて心をとく

亦見卓螢光

六条内大臣

雪とて雪とて窓に集る

貞享九年六月和漢書句

浦深潮未落

松の志は枝より根までなほ

事皆任自然

順見法師

少後こぬもなけくもとも年多の中

成市在門前

菅原秀長

花のら海客年ハ人のあはまきり

たき海客年ハ人のあはまきり

夕陽殘木末

前中納言某氏

老のきりーをこ夢のうき見に

窗森竹折腰

前中納言某氏

杖をたぐりていもといをほき

長湖接碧天

接少僧都親祐

やうやう舟路のうきハきりもなし

山人飯夕陽

菅原某氏

はるす木ハハも地一校とる人

道茂富無驕

法印玄惠

自をーまゝにまゐりて時を過さず
一行無之 尤多謝皆直美

名とせし年跡はあゝいなりなり
人老上陽宮

多窓園師

音々々窓のるゝ世静なり

雜句

景行天皇四十年夏六月東國乃
國酒抄の宿年北々々々々々

日本武尊

耳比磨利菟玖波塙酒擬
氏異玖用伽彌菟流

人しけり作らるゝ小或燭人章
の末をけり

伽我奈倍氏用耳波虛々
能用比耳波菟塙伽塙

九河因躬順

康和三年、四月、四日、五ツ子、女、孫、の、子
を、一、つ、ひ、つ、こ、と、お、め、し、う、か、た、り、ひ、の、な、を
さ、か、ら、う、に、古、万、葉、集、の、中、千、世、の、中、城
だ、り、い、く、と、い、む、と、い、ふ、こ、と、を、ト、京、ま、あ、へ、こ、も、
下、の、句、を、あ、ま、る、い、ふ、は

源順

世の中を何事もなくあきらむる

新
り
す
考
南
乃
華
の
上
乃
露

タつ巾を

飛
鳥
川

く
く
福の

風
之
ハ

土佐や

秋の田舎

二里江の

草木也

冬寒之

まふからぬお魚の美

さくらがき世ふさのふがに

夢 始 ころにふ 玉 ち 二

新堀毛子坂の白雪

かたはるは
新學の姫

かのうそくをの稿書

抄之小半也

ふ
新
か
よ
の
聖
を
の
び
の
書

如海
尺子
小計
如家
白雪

大中臣能宣集序

世の中常なきことを万葉集の中
よのびを何となくいふ歌あり

大中臣能宣記時文なりしを讀傳し中
世の中をなかりし多し人々

下き人乃
ちはるる
ぬき水乃
風さむ
吹く風を
神無月
いづみ
和国乃系
とち火を
草の葉の

氷とちふ春の池水
やとほ雪の夜のとも
ありし行衛なるのじ流州
善行秋のうはせとの歌
少きとさめぬ雪の約
時ふはきぬは歌なり乃色
風をり行法芽生る
うちきりし浪の上の雪
不たあはきは夏の夜
西のあまの月影

片句連詩

かき〜ソふ〜もあ〜
此句寛治六年十一月伊勢左神宮の
たく宣の法をたし〜
この國とて岩と〜
はあふあは〜
のえぬ〜

聖武天皇法製

い〜お〜あ〜
堀川院法製
堀川院法製
堀川院法製

時文學士源順書所跡坂上中成多也
藏人左近衛少将藤原朝臣仲用其
時別當せめさせ給ふ事神無月晦不
題のて下弦

神無とくきるとくやおもふ神無の

菟玖波集卷第二十

發句

二年の内に去るは日家乃連歌發句

前古訓言お家

春やとき古二年あけく雲あふり

後多和俊市時まゝは古雲歌年

藤原永乃能

昔歌をはる音年まゝを立年色

梅乃發句

二不法親王

ぬゝ間毛風あは梅乃白ひか

水野千句ま歌年

花近中將美詮

梅咲くまはるさへ花乃白いなり

家乃千句年

道寸美言法師

むえちあく、おうけ年法も白いなり

春の發句

前々細言お相

中室たりはるさへおきり歌か

京月法師

草市へ春木ののこはるさへ

兼意法師

風をさへ舞うはるさへ

平貞時家の連歌小

前々細言お相

あゝも室をいれり春のはるさへ

法瑞寺花下重なり

寂忍法師

花の色をかきとて又さへ春の月

長福寺花見

景阿法師

花咲く後ハ人ニききとて

花の發句小

持少僧都永運

新ハるさへ花いれり

如心法師

池水を花乃の泉は明くか

新式本式あひとくしるる尾の
花乃の泉一り二千句を記す

善阿法師

枝のこけ花ハヤ木能くさーあふ

雲を花雲成
乃の泉記す

澄月法師

雲乃の泉雨乃の泉花乃の泉

関白家万韻
雲乃の泉

周阿法師

月乃の泉花乃の泉花乃の泉

平圓時乃の泉花乃の泉花乃の泉
乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

小桑乃の泉

乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

貞和四年乃の泉乃の泉乃の泉
乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

関白乃の泉大臣

乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

久良親王

乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

常立乃の泉乃の泉
乃の泉乃の泉乃の泉

乃の泉乃の泉乃の泉

一木乃の泉乃の泉乃の泉乃の泉

乃の泉乃の泉乃の泉

花 ぞくさあまのや風のさきふき

云生法師

明 りもえん 花のふき山さく

勢多尾の花のふきに忍びて院の車
うそらまけりふ家日車なり

善阿法師

あまもくさく 花染のふきの

勢多尾のふきふき 花をふき 花
乃もふきふきなり

善阿法師

花 りくさくさく 花のふきふき

花のふきふき 花のふきふき

一万句のふきふき

性道法師

花 ざくさく 花のふきふき

貞和二年閏卯家藤喜岡よりふき
ふきふきの花をふきふきふきを月
ふきふきふきふきふき

二品法師

名 だくさく 花のふきふき

文和五年三月十九日西芳精舎花見
花見ふき

松 子くさく 花のふきふき

西芳精舎ふきふき 花見ふき

最古納言氏

さ、あつた花をさきふ風もなし

信照法師

見ゆ人をあつたきふ風もなし

地主の花より

足性法師

さ、あつた花をさきふ風もなし

寛元四年三月地主の花より

導生法師

風ゆけき花をさきふ風もなし

花より

救海法師

さ、あつた花をさきふ風もなし

正和二年三月法師の花より

南佛法師

さ、あつた花をさきふ風もなし

藤原俊頼朝臣

さ、あつた花をさきふ風もなし

藤原長泰

さ、あつた花をさきふ風もなし

花より

十佛法師

さ、あつた花をさきふ風もなし

良阿法師

さ、あつた花をさきふ風もなし

法隆寺の
花の下に

導性法師

り年 花のくく 青葉年 成如延 極

本運法師

いと いまー 風さへ 青葉年 成り 小なり

報恩寺 小く 喜の言を 兄傳り 青葉年

源頼氏 即臣

青葉年 毛花 あり 公家 嵐 小なり

多 窗因師 回家の後 西寺 精舎 花下

少く 万端 雲 影 付し 小

二 小 法 親 王

花や 夢 寂 家 夢 け 乃 名 跡 者

道寸 采言 法師

夜 鼓 花 毛 小 名 と 志 の 小 人

務原 知春

善 見ー 木の間 小 月 小 事 小 色

正和元年 三月 法 傳 寺 小 句

善阿法師

見ー 花 能 お も け 法 正 善 葉 年 者

友 法師 身 小 け 乃 名 表 源 頼 氏

青葉年 喜 事 歌ー 付り 小 法 年

救海法師

か とも なく 花 小 乃 名 法 日 新 部

前 古 卿 言 乃 氏 名

千 句 事 歌 年

野阿法師

静少殿なまこ抄見ゆき務乃美

三月五日のまね

花山院入道
右大臣

入相中々きまふまの余波ふ

三入尚式

美多風喜小鐘聞日可然ふ

北野社より三月書りてまね

最上納言經親

神りきをこひきふぬ春もか

後多羽院時百韻重なる

源家長朝臣

ふゆは代をうけふ白ふまき

元亨四年四月百韻まね

後宇多院御製

宵乃間きふき中來ふけかき

弘安二年五月宣旨下り吉社在

のきをのりて韻乃部をまね

免けふおむをもちひつて

最上納言お家

きくぬお抄公き法くはか

最上僧正安清

源

新夜ももかうやあふ人き

信昭法師

きくまふく月お抄の心保く

多富國師

啼けけをきき
と龍寺夢窓圓師位暉乃最子
万額連歌子

救済法師

啼けけをきき
修行乃時多庫の寄子泣きより公系
淨阿上人けじふより公夜夜の事歌子

地阿上人

月子啼けけをきき
善阿法師一廻の仙事の廊子一り午句
けけ子

のむけけ十歌一歌子蜀魂

文和三年四月亥の午句連歌子

道寸笑法師

けけをきき
一遍上人

けけをきき
西芳精舎

救済法師

山子谷と峯子のけけをきき

寂言法師

雲子をきき
五月五日

圓本最圓白
大臣

けけをきき
家の子句

最方納言子氏

申す、たれし年とていふ早苗か

正和四年五月伏見殿万願寺御中

伏見院御製

五月苗おめりきさし伏見やま

心野社 二品法親王

言はるの千種もあけ交夏野か

景阿法師

多しきおめりきさし年ぬ梅の苗

貞和五年六月たき勘督並美家の

万願寺御中 万願寺御中

心野社

月のこけ一夜乃松乃木の間に

海部宗信

周阿法師

入とくま月物海雲問の那

寧治元年八月十夜院の万願寺御中

藤右衛門氏

月のこけ秋の半おきし神なり

善阿法師

おきいさ月を草お結ひはる

有馬の温泉より八月十五夜

二品法親王

月の名をいふまかりきさしなり

後嵯峨天皇御時万葉集歌

藤原朝臣家

千代経天皇御時万葉集歌

光明法師

もろもろの世にわたりておのふ時を

安樂寺社歌にうまひをうたふ

救済法師

らまの世にわたりておのふ時を

常立寺院にうまひをうたふ

藤原朝臣家

か、枝まはし時をうたふ

貞和天皇御時万葉集歌

関白藤原大臣

り、入るおのふ世にうまひをうたふ

藤原の清浄寺院にうまひをうたふ

浄土上人

下、あふぬもろもろの世にうたふ

林喬法師

秋風をうたふ言あはれ木の葉を

元亨元年十月六日龜山為基歌

藤原朝臣家

そ、来ぬとてわたりておのふ時を

神皇正統記の頃救済大原

拉樂本より取つて傳へる閑居より
此法を授けしとの所云より傳へる

二不法親王

冬末より庭よりやまの紅葉を

同一所より

救済法師

穀よりなる染一時より下紅葉

最古の言より氏常と定候より万願寺より
傳へる

道譽法師

時より毛より庭より常と定候より

救済北野社より傳へる

景阿法師

木能和よりかきける所より傳へる

より二所より山より閑より木より紅葉

南仏法師

順覚法師

染ありより庭よりより法時雨より

文和四年より最大僧正賢俊閑寺より
傳へる

道譽法師

木葉より時雨より山より下風

文和三年閏十月より最大僧正賢俊

神無月より紅葉より庭より庭より

道譽法師

月より人より紅葉より庭より紅葉より

家よりより万願寺より傳へる

本ノ二、

忠房親王
白く際たる庭系式

並ち柳言子氏

日之け指雪ふも寒きあゝか

後宇多院右近馬場の明方乃雪由覧

一は家小あや一き女車くく家小一句
かけも雪おぬせらぬとて雪を

りきくふ月と雪雪のひるも若

文保乃市願ふく北野の社と年こそふ

千句寂即の若句

救済法師

さゆ夜ハ風と月と年更ふり

救済北野の社千句

桂少僧即永運

かふふぬくまの雪能夕の形

後醍醐院由時内裏百韻事終ふ

後光明院並園白
九大臣

九重千法もまゑ深一庭乃雪

暦應四年十月清水寺

救済法師

花をく雪千かしは枝もな一

関白家千句 大江成種

月をまハぬも雪のやまか

北野社千句

性道法師

兼々之梅乃雪小春をもちし

文和四年十二月清閑寺坊より

石韻連歌付小

最上僧正賢俊

あり明はし年如月の名跡あり

菟玖波集可被准勅撰可有
御存知之由
天氣所候也如此由可令申
入關白殿給仍執達如件

延文二年後七月十一日

日野左中辨時光

八月十五夜小関白藤原大臣
ふくひなき名を望みたる宵哉

文和四年八月十五夜小
道尊参法師

名小毛関白は平毛月のこといふ
九月十三夜家
月次連歌
二品法親王

たのしみきの月小毛のきかき
日夜連歌
道尊参法師

一秋平如夜乃月のかりこといふ
日夜
救済法師

月乃夜いかきもあきと更ふ公家

二品法親王平林院坊山水又侍人
はるをむくふし平月の頃より侍人
名小毛月の中がね
文和二年道尊参法師平向い侍
人、錢一侍人、平向い侍人

救済法師

中つて風去はまりぬ秋のる
夏山あきぬ水に秋をく人あき

後醍醐院御製

九重おとろけをうけあいつくこのふ
京の泉あきくふくふ顔のまね小

関白藤原大臣

名をせき月をくく夏もなし

関白家千句

藤原家平朝臣

草々く水もく水もく水もく

日家の千句

木結法師

夏草も花の秋もく水もく

七月朔日

順覺法師

木もく水もく秋風もく水もく

二所法親王
家千句

性道法師

卯あふき月もく水もく

嘉暦四年七月七日内裡の牛泉にて

右頭連歌

後光明照院
関白
左大臣

やのく水もく水もく水もく

元應元年七月六日大内侍林ちり

牛泉

後宇多院法親王

く水もく水もく水もく

弘長二年八月七日庚申乃事歌

後嵯峨院法親王

山もく水もく水もく水もく

菅少納言長綱朝臣

謨上刑部卿殿

追而中

依武家奏聞如此御沙汰假也
同可令申入給

阿州太子聖光明院之常什坊也

行忠判

元文二已如月中旬

源長授手書之

大寺の巻改波系中十六巻ヨリ
二十巻大尾撈延所持の巻
自今ヨリ世の中省乃明見示
忠為瑠川親中明見之安永下
百二年二月十二ヨリ及書留口
三月朔満手書

紀宗麻呂書寫

卷之四

三區溫酒

三區溫酒

三區溫酒

三區溫酒

三區溫酒

三區溫酒



八十下

